パルハット・トルスン

目　次

パルハット・トルスンについて　2
燃えている麦　4
カスィーダ（頌詩）　5
母語　6
詩人とゴキブリ　7
砂漠の呪文　8
ミイラ　10
ロプノール　12
ライバル　12
無　12

パルハット・トルスン（Perhat Tursun）について

パルハット・トルスンが新疆のアトシュという街で生まれたのは 1969 年、文革が始まってから三年後のことだった。彼が生まれたとき父親は「反乱軍容疑者」として逮捕され、独房に入れられていた。

毛沢東をはじめとする権力者たちの政治闘争から始まった文革では弾圧と殺戮がつづき、1000 万人以上とも言われる犠牲者を出しただけでなく、キリスト教会や仏教寺院、イスラムのモスクが破壊され、貴重な文化財が焼かれた。そして多くの宗教関係者が投獄され命を落とした。

1977 年、文革の終結が公式に宣言されたあと、中国は経済改革・開放政策に転じ、共産主義独裁政権を維持したまま資本主義経済に移行した。1989 年に天安門事件が起きるまで、これまで行われてきた少数民族への弾圧は弱まり、続々と民族の古典研究が進められ出版事業も活発になった。しかし、宗教活動に対する監視は依然として続けられていた。

文革が終わったとき、パルハットは小学生になっていた。アトシュで初等・中等教育を終えると、奨学金を得て北京の民族大学に入学した。早熟な少年で、中学時代にすでに詩作を始めていたと言われている。あるとき地元の図書館で偶然「現代有名作家」というタイトルのウイグル語の本を手に取り、それが、彼が西洋文学に興味を抱くきっかけとなった。

中国語に翻訳されたものがあることを知っていたパルハットは大学に入学したあと、西洋の文学や思想関係の本を読むために本格的に中国語の勉強に取り組んだ。そしてフロイト、フォークナー、ショーペンハウアー、カミュ、カフカ、ジェームス・ジョイスと、手あたり次第に読みつづけた。それと同時に創作活動を開始した。大学を終えたあとパルハットはウルムチで「群衆芸術館」という機関の研究員として勤めながら創作活動を続け、1998 年には詩集『愛の抒情詩 100 首』が出版された。

ところが 1991 年に発表した『砂漠の救世主』という小説が、イスラム教保守派の人々の批判の的になった。聖書からの引用とイエスの教えが書かれていたので、「パルハットはクリスチャンになった」、というのである。

そして 1999 年に発表された小説『自殺の芸術』は、さらに彼の名を高めることになった。内容は哲学的なものであったが、セックス描写や自殺の詳細な描写が問題視され、本文中に記されていた数字の解釈で「これは預言者ムハンマドの生誕の年である。彼はイスラム教を冒涜している。イスラムの恥だ。」と非難された。クチャの学校ではその本が燃やされた。そして「交通事故で死ぬぞ。」、「タリバンから殺されるぞ。」などといった脅しを受けた。

2015 年に彼に会ったアメリカ人ジャーナリストのベサニー・アレンは彼を「中国のサルマン・ラシュディ」と名付けた記事を書いている。彼女が「あなたは、これを書いたら社会がどう反応するか、考えなかったのですか」と質問したとき、「何も考えませんでした。ただ書くのが好きで、だれも書かないから書いたのです。」と彼はこたえた。パルハットの詩の英訳を発表しているジョシア・L・フリーマン教授（プリンストン大学教授）は、「彼はいつも、仏教の経典や聖書を読んでいた」と自身のブログに書いているが、そのことは詩に登場する比喩からも明らかである。彼は詩人であり作家であり、思索する人なのである。

パルハットが翻訳の仕事をしながら、周囲の批判にも屈せず創作活動を続けていたあいだも、中国政府の少数民族への締め付けは決して緩んではいなかった。

1996 年、民族意識を強く抱くウイグル人たちが、「政府にすり寄っている」という理由でイスラム教聖職者を殺害する事件がカシュガルで起こった。これを機に、少数民族への弾圧は加速度的にその度合いを増していったのである。

ジョシア・L・フリーマン教授は、新疆の少数民族の人々が強制収容所に入れられているニュースがマスコミやインターネットで報じられるようになってから、パルハットの身を案じて、次のように語っている。

「私はパルハットとかなり親しくなった。ウルムチに住んでいた 2000 年代後半から 2010 年代初頭にかけて、白酒（中国の蒸留酒）を飲みながら、数えきれないほど夕食を共にした。パルハットはまったくユニークな性格をしていた。才気にあふれ、強情で、面白かった。 友人には非常に誠実であり、ライバルには、とりわけウイグル人社会における保守的知識人には手厳しかった。パルハットがいろいろな場所で、最大の皮肉をこめて彼らを批判したであろうことは容易に想像できる。」

教授の不安は現実のものとなり、パルハットが拘束されたという知らせが、新疆からアメリカに逃げてきた共通の友人から彼のもとにもたらされた。

パルハット・トルスンは 2018 年 1 月、拘束され、「思想改造のための強制収容施設」に収監された。彼を反イスラム的な人間だと言って、先頭に立って非難していた批評家ヤルクン・ローズィーも捕らえられ、同じように強制収容所に入れられた。
彼らが解放されたという知らせは、まだだれにも届いていない。

……

参考とした資料

●Meet China’s Salman Rushidi-Foreign Policy
https://foreignpolicy.com/2015/10/01/china-xinjiang-islam-salman-rushdie-uighur/

●Uyghur Poetry in Translation: Perhat Tursun’s “Elegy”
https://medium.com/fairbank-center/uyghur-poetry-in-translation-perhat-tursuns-elegy-902a58b7a0aa

燃えている麦

私は　皆に呪われている彗星①
暗黒の宇宙を 目的もなく
落ち着く場所もなくさまよう

愛してくれ　　復讐者が手を滑らせてチャンスを逃す
その最後の一瞬の　激しく執着する思いのように

私は　木に影を刻みこまれてしまった男
その日から　死人とみなされた

愛してくれ　殺人者が罪を犯すそのとき
煮えたぎる頭の中で　沸き起こる妄想のように

私は天国にあって　燃えている麦②
かまどの火のような　灼熱の陽光の中で　凍えて震えている麦

愛してくれ　理性を失った人間に囲まれたマゾヒストが
理性を激しく求めるように

私は狼　その骨は呪術師の手の中で冷たく光る③
私はまじないのことばに乗って
土に　空気に　火に　水に広がり　散らばる

愛してくれ　黄道十二宮六番目④の位置に
太陽と月が同時に現れるときにさえ起らない
奇跡のように

（2004 年 8 月 25 日　ウルムチ）

① 古代において彗星は君主の死や王朝の滅亡、天災、疫病などの凶事を予告していると信じられていた。
② マタイによる福音書（13 章 24-43 節）にキリストの言葉として「毒麦は悪魔に蒔かれた子らであり、彼らは世の終わりの時に刈り取られて火で焼かれる。」という一節がある。
③ ウイグルには狼を民族の始祖とする伝説があり、ほかに匈奴、突厥、キルギスにも同様の伝説が残されている。
④ 古代の天文学では、黄道（地球から見た太陽の通過軌道）を 12 に分け、地球から見える天体の位置が定めら、占星術に用いられていた。

カスィーダ（頌詩）

雪の山を逃げていくとき
凍えて死んだ者たちの　遺体の中から
君は僕を　見つけられるだろうか

僕は同胞に庇護を求めた
彼らは僕の死体から　服をはぎとった
君がそこを通るとき
見えるのは　裸になってしまった僕だから

彼らが虐殺を　まるで愛しているかのようにして僕に強いたとき
僕が君と居たことを　君は知っているだろうか

頭蓋骨で建てられた塔の中には　僕のもある
刃の切れ味を試すためだけに　彼らは首をはねた

剣の前で　我々が愛してきた「因果応報」の関係が
まるで狂った恋人の手で壊されたかのように
一気に断たれてしまったとき
僕が君と居たことを　君は知っているだろうか

バーザールが射的場となり
毛皮の帽子をかぶった男たちは
だれかれ構わず　的になった①

頭に弾丸を撃ち込まれた男は　苦痛に顔をゆがめた
自分が撃ち殺されたわけを知ろうと見開いた
その目の中で　殺人者の姿がかすんでいった

そして弾丸のせいで熱を持った脳の中に
僕の姿が映りこんだ
そのときも
僕が君と居たことを　君は知っているだろうか

飲酒の罪が　血を飲むことより軽いとみなされていた時代
血の中のひきうすで挽かれた小麦粉の味を
君は知っているだろうか

エリシル・ナワーイーが夢中になって求め続けた酒の味は
私の血をサンプルにしたもの
神秘の酔いの　最も深い層に至ったとき
僕が君と居たことを　君は知っているだろうか②

（2006 年 3 月　西紅門　北京）

① 「毛皮の帽子をかぶった男たち」は、少数民族の男性を指す。
② エリシル・ナワーイー（1441～1501）はティムール朝の政治家・詩人。チャガタイ・トルコ語で多くの作品を遺し、イスラム神秘主義思想が詠み込まれたものも多い。

母　語

友がヨーロッパに移住して　長い年月が過ぎた
一年前　肝臓ガンにかかり　異国で目を閉じた
妻はヨーロッパ人　子供たちもその地で大きくなった

目を閉じる前のただ一つの願いは
母語――ウイグル語で会話をして
別れの言葉を告げることだった
だが残念なことに　だれにも理解できなかった

彼は妻に語った

生まれて最初に聞いたことばは　ウイグル語だった
私が泣けば　父母はウイグル語であやしてくれた
キスしてくれた　撫でてくれた

母はウイグル語で　子守唄を歌ってくれた
子守唄は優しく眠らせてくれた　聞かずには眠れなかった
目は閉じず　悪夢を見るのを恐れた

はじめてウイグル語で　愛を感じた
はじめてウイグル語で　美に気づいた
はじめてウイグル語で　自由を聴いた
はじめてウイグル語で　語ることを学んだ
はじめてウイグル語で　望みを伝えた

はじめてウイグル語で　痛みを訴えた
はじめてウイグル語で　喜びを表現した
はじめてウイグル語で　愛を語った

ウイグル語で　魂の世界を組み立てた
この言葉がなければ　この世界は崩壊する

私の肉体は他人の実験室となり
私の頭は　厄介な文法書と辞書の結合体となり
別人が私の口を借りて　話しているようだった

なぜなら長い年月をふるさとで過ごしたあと
この地に来てはじめて知ったからだ
自分と違う多くの民族と言葉があることを

ことばを学んでいるときには
いつも　「別れの悲しみ」がからみついていた
第二言語の拷問から　解放されることはなかった

私はただ　この母語の中で生きているだけ
ここは私の唯一の領土
占領することはだれにもできぬ

私は母語の中にいるときだけ自由
私の唯一の夢
かき乱すことはだれにもできぬ

詩人とゴキブリ

詩人の家は　ゴキブリに占拠された
自分の書いた詩さえ　ゴキブリにレイプされた
ゴキブリを殺し　思考を清潔にしようと決心した
ゴキブリ薬が売ってあり　説明書に書いてあった
「これを食するとすぐ　ゴキブリはうつ病になって
数日のうちに　集団自殺する」
だが　厄介なゴキブリは
いまわの際の人間より楽観的だ
滅亡の前に　前にも増して繁殖するだけでなく

いまわの際の人間よりも
さらに極端に　悲観主義を否定する
暴力に夢中になった詩人は信じていた
「詩を書くことで　敵を消滅させられる」
だが厄介なゴキブリは　詩の効力を知らない
その結果
自殺するのはゴキブリではなく　詩人かもしれない

（2004 年 11 月 4 日　ウルムチ）

砂漠の呪文

果てしない砂漠は　すべてを飲み込む
我々に残されたのは　死のように秘密めいた戒めの言葉

その言葉はのどを絞めつけた
その恐怖の中で成長した世代は
人生のようにくるくる変わる予測に
暗闇の中で　立ち向かうことができない

ああ　アナルグリ①　ああ　私の避難所
戻ってきてくれ　思索の恐怖の中から抜け出て
戻ってきてくれ　暗闇の安らぎの中から抜け出て

皆から見捨てられることを　私は願う
見知らぬ街に　逃げていきたい
「堕落」中毒者を満足させてくれるような街に

あらゆる路地で
新しいものを味わう感覚に酔いしれる
だが　明日になればすべては変わる　それは事実

ああ　アナルグリ　ああ　私の「悪」
戻ってきてくれ　暗い画像の中から抜け出て
戻ってきてくれ　まず判決を聞き　それから罪を犯せ

鏡を見てごらん　何が見える？
それは君ではない　凝縮された暗闇

君は　私の愛するもの　私の唯一の暗黒
君は　決して醒めることのない夢

先祖が　土ぼこりの中に呪文を入れた
それは飛んできて　酒が作り出した暗闇の中に入った

そして水の中のアナルグリを　激しく燃えさせた
君は言った　そこで「永遠の露」を見つけたと

ああ　アナルグリ　ああ　私の「完璧」
戻ってきてくれ　大地の子宮の中から抜け出て
戻ってきてくれ　イチジクの木の下から抜け出て

君は私を　探し出せるだろうか
どのような暗示があろうとも
君には目的の地を示すことができない
昨夜の砂嵐は　すべての痕跡を消し去った
ただ　砂に血の跡が残った
アナルグリは燃えた　天国で
影がないのは炎だけだ

ああ　アナルグリ　ああ　私の無限
戻ってきてくれ　大地の子宮の中から抜け出て
戻ってきてくれ　イチジクの木の下から抜け出て

君は私の愛するもの　私と結合しようとして
骨さえ失って
ついに毒蛇に変わってしまった

私の下で　君の体は川のように流れうごめく
君は私を　ほんとうに見つけられるだろうか
私は　あの川で泣いている影

ああ　アナルグリ　ああ　私の最後の狂気
戻ってきてくれ　悪魔の光の中から抜け出て
戻ってきてくれ　神の闇の中から抜け出て

この劇の監督がだれなのか　わからない。
舞台上ではひとことのセリフもない

我らはここで　道具にしか過ぎない
我らが燃えることは　唯一の殺人の手段
自分を保っていられない

ああ　アナルグリ　ああ　私の理性よ
戻ってきてくれ　愛の息苦しさの中から抜け出て
戻ってきてくれ　苦痛の陶酔の中から抜け出て

（2004 年 11 月 25 日　ウルムチ）

① アナルグリは女性に付けられる名。「ザクロの花」の意。

ミ　イ　ラ

ミイラは何千年もの間　腐らなかった
私の血を　絶え間なく吸いつづけてきたから

古代の墓に入る探検家は　無数の謎めいた符号にとまどう
現在　我らにはみな　符号が付けられているから

我らのあいだで道に迷った霊魂を
前衛的なコウモリは　果てしない暗闇へ案内する
時代遅れの蛾は　炎へ案内する①
三番目の選択肢は　無い

我らは炎と暗闇の間で　道を見つけられない
我らをついばんだカラスたちが　空を覆った
その影の下で　私は震えた

史上　最も長く生き延びている生き物はハエだ
だが　ハエがトーテムとみなされることはない
蝶々がこの世の終わりのような騒ぎを起こすから
自分の身元を特定できないと　騒ぎだすから

巡礼者は静寂を怖れる
なぜなら　選択のチャンスが失われるから
しかし　私はさまようタンポポ
風があらゆる所に吹き飛ばしてくれる

呪われ　侮辱され　陰謀に巻き込まれ　恫喝された
それらが　私の唯一の財産

ミイラたちが疫病にかかったようによみがえった
カラスたちの姿で　私の目は覆われた
出血が激しくて　青ざめた太陽が見えない
私の最後の選択が　激しい痛みをともなったそのとき
ミイラたちが　はっきりと姿を現した

それらの体は　かつては血の所有者だった
愛を呪うために　私は熱い血は捧げた

お前たちは悪夢を編んでいく　毒蜘蛛
私はさまようタンポポ　風があらゆる所に吹き飛ばしてくれる
私は放浪者　空と大地のあいだをさまよう

私は暗闇の中に　永遠に消滅したくはない
私は炎の中で　永遠に焼かれていたくはない

私は　闇と炎のあいだを巡る放浪者
お前と違って暗闇を恐れない　冷たい土を恐れない
だからミイラに変化することは決してない
永遠に終わらないことを選択したから

（2001 年 1 月 7 日　ウルムチ）

① 古典詩において、「炎に自ら飛び込んでいく蛾」からの連想で、炎が恋人、蛾が恋人を追いかける者、とする定番の比喩がある。

ロプノール

ロプノール　ロプノール
お前は大地の鏡
青い空と白い雲を映しだす
お前はわれらの信仰と魂の象徴
満天の星を映しだす
お前は　われらの祖先が遺した
決して消えることのない足跡

ロプノール　ロプノール
お前は死のように神秘的だ
だが死ではない　お前は生命の源
初恋の人のような魅力の持ち主
永遠に変わることはない　と思われた
だがすでに　すべては
砂漠の奥深く　埋もれてしまった

ロプノール（ロプノル湖）はタクラマカン砂漠北東部にある塩湖で、「さまよえる湖」として知られていた。1921 年にタリム川の流れが変わったことから湖が復活したが、現在は上流にダムが建設されたため、完全に干上がっている。

ライバル

彼らはライバル　いっさい妥協することがない
歩くときは　まったく反対方向に行く
だが　いつかある日
彼らは同じ地点に現れるだろう
なぜなら地球は丸いから

闇に向かっていく者は　決して振り返らない
光に向かっていく者も　決して振り返らない
だが　いつかある日
彼らは同じ時代に現れるだろう
なぜなら歴史は円形だから

無

シャカムニ（釈迦牟尼）は弟子アーナンダに尋ねられた。
もしだれかに目をえぐられたら
何が見えるか
アーナンダはこたえた。何も……

もし土で耳がふさがれたら
何が聞こえるか。
アーナンダはこたえた。何も……

お前の鼻が嗅覚を失ったなら
何が臭ってくるか
アーナンダはこたえた。何も……

お前の体がまひしたら
何が感じられるか
アーナンダはこたえた。何も……

シャカムニは弟子に　教えて言われた
目の前の世界はいつわりだ
すべてが我々の幻想だ
我々の感覚がなくなれば　それらは存在しなくなる
……
シャカムニが世を去って後
アーナンダは師が亡くなったことを信じなかった
なぜなら　彼自身はまだ存在していたから

彼は言った。

私はあなたの幻想です
あなたが思考を止めたら
私は存在できなくなります
……
それゆえ人々は
シャカムニを永遠のものとみなすようになった
ただ自分が存在するために

（2005 年 1 月 8 日　ウルムチ）……

翻訳に用いた主な資料

●Edip Perhat Tursun Shé'irliri
https://tengritagh.org/2016/03/17/perhat-tursun--sheirliri/

●TWO POEMS BY PERHAT TURSUN Perhat Tursun
https://www.academia.edu/6984747/Two_Poems_by_Perhat_Tursun_Morning_Feeling_Elegy_

（翻訳：東綾子）